

七七日

しじゅうくにち

電車で、小学生の遠足と乗り合わせた経験はありませんか。あの騒然たる音声の渦中にまき込まれたかたはありますか。引率の先生がいくら制止しても子供たちの口を封じてしまうことはできず、まったく耳をろうせんばかりの音声に辟易させられるのが普通です。そこで、もし今度、そういう機会があったら、この騒音に、ほかの乗客のどういう人が鋭敏に反応するか注意してみませんか。かりに、露骨に顔をしかめたのが、同期の子育てを終えた年代の中年婦人だったら、それは他人事ではありません。このご婦人は、かつて自分の子供も同じようにあたりに迷惑をかけていた事実

入寂静

に思いが至らず、心の中で「なんという行儀の悪さでしょう。こんなシツケをしたお母さんの顔が見たい」と罵りつづけているかも知れません。すると、ご婦人の心の中の叫びは、むしろ子供たちの騒ぎより、もつと騒然としていえるといえます。こういう手前勝手な怒り、腹立ちは「嗔恚」といい、人間の煩惱の一つです。

寂静に入る——寂も静も「しずか」を意味します。お浄土の清らかなさというのは、そうした騒然たる心のさわがしさが、いつさいなくなつた、すがすがしい世界だといえましょう。

